



＜タイ農村の子どもと母親-筆者撮影＞

『総合教育技術』一九六五年一月（小学館）

東南アジアの教育課題と日本

矢口 新

国立教育研究所教育内容研究室長

異相の国々

東南アジアの現状を今から約一世紀前の日本の状態にたとえる人がある。きわめて大ざっぱにはそういうことも言われようが、そういうことでは東南アジアは理解できない。教育事情の理解もそんなことでは見誤るおそれがあると言ってよい。

東南アジア諸国といってもいろいろな国があるが、概して植民地であった国が多い。あるいはヨーロッパの浸透力の強かった国である。このことは予想外に大きな性格をつくっている。つまり、簡単に日本が開国したころの文化・文明のレベルや国情と同じであろうと考えてはならないのである。植民地であったということは、国民の中に、非常に啓蒙された一部のの人たちと、植民地の支配体制の中でまったく奴隷的な取り扱いを受けた

大部分の人との二種類の階層を生み出している。つまり、国民統一をいう点で日本の開国時代よりはるかに不利なものをもっているのである。しかしまたある一面で、有利な点もあるかもしれない。それは一部ではあるがヨーロッパ的レベルと同様な階層をもっているということである。その階層だけを見ていると、日本よりはるかにヨーロッパ的な生活形態や習慣をもっている。それは発展のエネルギーである。しかし、そういうヨーロッパ的文明・文化は、一部の階層の人々の中だけにあってはならない。国の中のいたるところにある。道路や建築やその他さまざまなところに、国民の前にあらわになっている。大部分の国民は、多少ともそういうものにふれているのである。それは、東洋の島国で、長い鎖国の中にあつてそういうものにふれなかった日本の国民とはまったくちがうのである。まったく新しいと言ってよいヨーロッパ文明にふれて、文明開化にまっしぐらに突入した当時の日本の社会的ふんい気は、すぐれたもの、新鮮なものに対するおどろきがあつた。あこがれがあつたのである。

長い間植民地支配にあつて、ヨーロッパの文化・文明に多少ともふれつづけてきた東南アジア諸民族は、新鮮な好奇心に欠けている。あるいはすぐれたものは、自分らと縁のない

ものだと思っっているかもしれない。近代化がむつかしいのは、第一にこの点にある。ヨーロッパにもアメリカにも、文明国といわれる国の中には、こういうように長い間植民地的・奴隷的支配になれてしまった国というものはない。お互いに競いあつて、発展してきた国である。そういう点を考えると、東南アジアの新興国が、真に新しく起こった国として、独立国らしい国民的性格をもつにはかなり長い時間を要するのではないか。少なくとも世代の交替ぐらいの時間が必要であらう。

ということは、教育がたいせつな役割を果たすということである。独立した国のみずからの教育が独立国民を育てるのである。この場合の《教育》は、広い意味に考えたほうがよい。独立したということ、そのことの中における生活が国民を教育するであらう。そういう生活が教育するのである。生活の教育的機能は、アジアの教育の場合に特に忘れてならないことであらう。アジア諸国の教育を問題にする場合に、単に学校制度だけを見るのではなく、たいせつな問題を忘れることになるのである。

東南アジア諸国の教育を、ヨーロッパやアメリカの近代国家の教育を見ると同じ尺度で見れば、ただレベルの低い国という平板な把握しかできないであらう。日本人はとかく

目が西欧に向いているから、そういう見方をする人が多いが、それでは真の問題を発見しない。学校が少ないから学校をふやさなければならぬ、といった平板な結論しか出てくるとはちがうのである。そういう点で《異相の国》と言うべきであらう。

インドのゴカールの研究で発表した教育調査に、学校教育を受ける期間と文字を忘れる率との関係の調査がある。つまり何年間ぐらい教育を受けると文字を忘れないかという調査であるが、二年・三年ぐらいで中途退学する者はほとんど文盲にもどつてしまうのだという結果が出ている。しかもそういう中途退学の生徒がきわめて多いわけであるから、問題はやつかいである。しかし問題は、学校で文字を修得しても、それを使用する場がないことである。社会がそこまで行っていないのである。だから学校で文字を修得したとしても社会に出て忘れてしまうのである。多少とも近代社会になれば、文字を使うということが生活のなかになくはならないはずであるが、そういうものがない社会なのである。コミュニテイ・デイヴィンロープメント（社会開発）ということが特に重要な意味をもつのは、そういう問題があるからである。《社会教育》と言われるものが重要な役割を

果たす分野がある。しかし《社会教育》といっても、これまた日本で考えるようなものではない。日本の社会教育は、学校教育が存在する上にあるものであるが、東南アジア諸国のものはそういうものではない。もっと具体的な社会の生活形態の切り替えに直結したものである。《社会開発運動》というような形をとらなくてはならない。生活の全分野にわたつて切り替えの問題がある。日本で最近問題になつてきている僻地教育運動のごとき形態をとるであらう。しかし日本の僻地教育運動はまだまだ容易である。国全体がそういう僻地であるということになると、問題は深刻であると言わなくてはならない。

宗教の国々

東南アジア諸国を見るときに、もう一つ忘れてならないのは、その諸民族のもつ宗教がきわめて強い力をもつていて、国民の生活に大きな影響を与えていることである。インドとパキスタンの例のように、同じ民族でありながら、国を割るほどの力をもっている。しかしそれはインドやパキスタンばかりではない。ビルマやタイのように、仏教が力をもっている国もあつてそれがまた国民の生活・習俗を絶対的に支配しているのである。

ヴェトナムのような国では、それがカソリックと仏教の争いとなることもある。

この宗教の力は、日本におけるいわゆる宗教とはまるでちがったものをもっている。どちらかと言えば、日本ほど非宗教的な民族はないと言ってもよいかもしれない。そういう感覚で宗教を考えたのでは、東南アジア諸国の宗教問題は理解できない。特に教育に対してもっている力を認識することはできないであろう。しかし日本でも、仏教が過去一〇〇年も支配した国であるから、習俗として日本の生活を支配していることはたいへんなものがある。われわれはそれを意識していないが、それだけ生活の中にはいりこんでいるのだとも言える。各家庭の年中行事を考えてもわかるであろう。あるいはこの観光地へ行っても、仏教的伝説や説話にふれないことはない。それをスムーズに受け入れるのがわれわれの感覚である。

そういうことが、東南アジアではもつとほかに強烈だと考えてよい。信じて疑わない生活の姿、習俗がいずれもかれらの宗教と結びついていのである。「思いこんだら命がけ」というほどのものである。

現代の教育が科学を基礎にしていることはだれも認めるが、この科学も一つの宗教だと考えられはしないか。そう考えると、科

学という宗教と、在来宗教とのせりあいが、東南アジア諸国ではたいへんな問題となるわけである。東南アジアにおいては、教育がもちこんでくる科学的なものに対して、それほどの抵抗があるということを忘れてはならないのである。宗教の争いがいかにものごいものかを知っているわれわれは、東南アジアの諸民族が教育のもたらす科学的なものに対して、新しい宗教に敵対するほどの抵抗があると見なくてはならない。そこに教育のむつかしさがあるのである。よく聞く話に、理科の教育で、動物の解剖もなかなか抵抗なしにはできないということがあがるが、そういう例はざらにある。食べ物一つでも、やかましい戒律に支配されている人々がいる。一年の間に何か月という断食期間がある。それが強い信仰と結びついている場合、日本人的センスでしりぞけるわけにはゆかない。しかし現実にはそれは、近代的教育と言われるものと具体的に衝突するのである。こういう点からまた、東南アジアの諸国は異相の国々であると言つてよいであろう。

民族主義と社会主義

東南アジアの国々を表通りだけさつと見て歩けば、どこの国へ行っても、近代的な小

学校・中学校・高等学校・大学にお目にかかることができる。それは前の植民地の支配者の遺産であったものも多いが、とにかくりっぱな教育が存在している。その教育を受けている人々は、ごく一部に限られているにしても、その人たちだけを見ていれば、世界で最も進んだ段階の教育を受けているのである。場合によっては、日本の大学教育よりもすぐれているかもしれない。そこで学んでいる学生は勤勉であり、たとえばイギリスのケンブリッジやオックスフォードにあるいはアメリカのハーバードやMITに、どんどん留学していくすぐれた学生がいる。そうした人々は、現に長い間にわたって養成され、国の指導者としての役割を果たしつつあるのである。かれらの見識は高く、学問的にも世界の一流に伍して劣らない人々が多い。

そういう人々に接すると、われわれは、きつねにつままれた思いをする。一方で飢餓の民と言われる人々がいるかと思うと、そうでないまったく洗練された現代一流の人物にお目にかかるのである。二重構造ということばがあるが、まったく極端な二重構造、植民地的二重構造である。

東南アジアをまわった人々が、それらの民族を怠惰だと批評したり、その理由をその熱帯的・モンスーンの気候風土に帰すること

があるが、そう単純に割り切れないものがあるのではないか。もちろんそういう一面もあるであろうが、しかしその中からすぐれた人物が出ている。そういう人々を見ると、広い意味で教育の力というものの偉大さを感じずにはおれないのである。そう考えると、いわゆる怠惰な民族性をつくりあげたのは、歴史的風土・植民的支配ではなかったかと考えさせられる。

いまこれらの国々が独立して、みずからの教育をもとうとしていることは、その意味では、大きな希望をいだかせるのである。たとえ長期を要するとしても、東南アジアは明るい前途をもっていると考えてよさそうである。

《アジアの民族主義》ということばが聞かれるが、たしかに、そういう思想は東南アジア諸国興隆のカギとなるのではないか。そこには行きすぎもあるうし、失敗もあるうし、先進諸国にとっては荷物になることもあるうが、民主主義的方向はそれらの国々を支えるもつともたいせつな柱と考えなくてはならない。アメリカがヴェトナムで成功しきれないのは、結局そういうものに対する認識不足があるからであろう。国を支える柱が民族主義的なものだといっても、それを野放図に許すことができないのは、先進国の親心とも

言うべきものであろう。もちろん様々な利害関係も含めているから、簡単に親心とのみ言うことはできないが、東西両陣営ともアジアの行動を野放図に許すことはできないであろう。そこに援助競争のさまざまな側面があらわれてくるのである。



＜独立後新しく建設されたマラヤ大学の図書館＞

民族主義と同時にもう一つ考えなくてはならぬことは、社会主義的な方向である。アジアの方向は、共産主義ではないにしても、社会主義的な方向に向かなければならぬこともまた歴史の必然ではないであろうか。こ

れはむつかしい国際問題でもあるので、簡単には言えないことであるが、現代のこれだけ進んだ産業社会の中で、東南アジアが、先進国のあゆんだとおりを歩くことは不可能であろう。先進諸国の巨大な資本がその発展の援助をするにしても、そのエネルギーを最も有効に使用し、飛躍的な発展をとげるには、かなりの社会主義的統制の方向が必要であろう。民族主義と社会主義と、奴隸的人間からの解放とは、現代の東南アジアの最も大きな関心となつていられる。この調和をどうするかが大きな課題であるとも言える。先進諸国の援助も、この点の認識をあやまると失敗に終わるであろう。アメリカのヴェトナムでの失敗もまさにその点にあると言つてよい。

二十一世紀のアジア

現代の世界は、二十一世紀をめざして、教育の改革を行ないつつあると言われている。東南アジアもまた異なった意味で二十一世紀をめざして教育開発を行っていると見える。東南アジア諸国は、文字どおり二十一世紀の国であると言つてよい。

現代世界史の大きな流れを見ると、二十世紀の前半にソ連邦が誕生し、あの日露戦争に

敗れた国が、今や世界の動向を支配している。第二次大戦は新中国を生み出し、誕生時のソ連と同じく世界にいられない国としてあつかわれながらも、しだいにその発言力を拡大しつつある。そしておそらく、二十一紀には、その他の東南アジアの諸国が大きな発言力をもって、新しく世界史の中に登場してくるであろう。そのときのことを、東洋の一小国、島国日本は覚悟しているであろうか。世界はいま東南アジアの育成に狂奔していると言ってもよい。日本は遠からず、それらの国々の中の一國として生存する国となるのである。それが日本の行き方を大きく左右するであろう。日本はアジアにもっと目を向けなければならぬのではないか。

日本には現在、東南アジア各国からの留学生が数多く来ている。かれらの多くは、技術の獲得に來ていると言つてよい。それはいわば、島国民族たる日本と東南アジア民族との交流をはかる人々である。かれらとひざをまじえてつきあふことは、かれらの中へわれわれがとけこむ大きなチャンスなのである。つまり、かれらを教育してやることにより、われわれもまた大きく教育されつつあるのである。

しかし、日本の留学生教育は、残念ながら今までのところ成功とは言えない。日本の大

学教育のあり方では、かれらに満足を与えることができない。そこにはさまざまな隘路がある。第一に言語である。東南アジアの留学生はどちらかと言えば、大部分が英語国民である。日本語を身につけて來ている者はほとんどない。かれらが一年や二年で、日本の大学教育を受けられるようにはならないのである。かれらの生活も日本以上にヨーロッパ的である。日本人よりはるかにホテル住まいに向いている。そこにまた大きなギャップがある。かれらの学力は低いと言われる。かれらの置かれた環境からすれば、学業を成就するのには、あまりに多くの壁がありすぎると言うべきである。

これらがこのまま放置されてよいことであらうか。留学生が日本の教育にはいれないのは、裏返しすれば、日本が、かれらの生活の中へはいれないのである。そのようなことでは、新しいアジアの国々の中で、日本が生存していけるであらうか。

《カラチプラン》というのは、ユネスコが計画して、一九八〇年までに、東南アジア諸国の初等義務教育を一〇〇%にしようというプランである。現在進行中であるけれども、必ずしも順調に進んでいるとは言えない。しかし、ともかくこれによって、東南アジアの教育の近代化の基礎をつくりあげようとし

ている。こういう仕事に日本はどれだけ参与しうるのであろうか。本来ならば、千載一遇の好機としてみずから進んで積極的役割をになうべきなのではないか。そのことによつて、東南アジアの中へはいり、その中で生きることを会得する機会なのである。初等義務教育の完全遂行といつても、それはあらゆるビジネスを伴うものである。そういうあらゆる面からの援助を通じて、それらの国々とともに生きるすべを学んでおくのはよいことではないか。

総じて日本の目が東南アジアにもっと強く向けられなければならないと言われるが、なかなか教育に関しては、最も理想的な姿で、それらの国々を援助することができないのではないか。そういう実践を通じて、日本は日本のアジアにおけるあり方をつくりあげることができるのである。たとえば留学生を完ぺきに受け入れることができる体制をつくることは、日本がアジアとともに生きていく体制をつくることなのであろう。カラチプランに貢献することは、かれらとともに生きていく日本の体制をつくることであらう。そういう点から、かれらの教育のあり方を研究し、課題を発見し、それに協力する体制をつくることが、ぜひとも必要であらう。